
ベルセルティの手紙

汐見圭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ベルセルティの手紙

【コード】

N39300

【作者名】

汐見圭

【あらすじ】

私が知ったものは……？

友人であるベルセルティ・アジクバリオンが死んだとの一報を受けたのは幸か不幸か、私が夜行列車の中で二十六歳の誕生日を迎えた十一月某日の事だった。

彼は常に冷静沈着且つ傲岸不遜といった面持ちだったが、私からすれば常時暗闇でナイフを研いでいるかのような危険人物にしか見えなかった。周囲の奴らは彼のことをそういう意味も含めて『cool』と言っているのか、と私は非常に感心した事を覚えている。

だが同時に、私は彼が唯一心を許した同級生である事にも変わりはない。そんな名誉且つ不名誉な称号を、こうして彼が死ぬまでに得ることが出来たのは、世界広しといえど私一人だけであろう。彼の猜疑心はまるで虎や獅子のようであり、学生時代の友人は腫れ物に触るかのように彼を扱った。仕方有るまい、と言えるのは彼が亡くなっているからだろう。

いつしか彼は私の事をデイクと呼び始めた。なので私はお返しとばかりに彼のことをベルスと呼ぶ事にした。その事を伝えたとき、彼は教室中の生徒が飛び上がるくらいに大声を上げて笑い転がっていた。

この辺りから、彼は私にプライベートを許すようになる。成績は下から数えた方が早かった私のケツを何度も叩いてくれたのは彼だった。

おかげで、私と彼は同じ大学に入学を決めることが出来た。その日、二人で祝杯をあげて互いの勝利を喜んだ。

そして数年後。私たちが同時に大学を卒業した後、私が彼女と別れて若干の傷心の中、彼は結婚した。だがその時の私には彼を祝う暇すらなかった。百キロ程離れた場所で公務員として働く事が決まっていた為だ。仕方がないので私は彼に手紙だけ送っておいた。

それが、私と彼の最後の交流だった。

あつけないものだった。人と人との繋がりという名前の糸はこうも容易く切れるモノなのか、と。私がこうして彼の死を知れたのは偶然であり、もしかしたら知らぬままに数年以上が経過していたのかもしれない。その事を考えれば、この事態は幸運とも言える。

だから私はこれから彼の供養に向かう。彼の最後の足跡を踏みしめて、彼の人生を噛み締めたいと思う。

私は電車を降りた。

久しぶりの帰郷だ、色々待っている人も居るだろう。急がなくて
は。

私は電車の中で読み尽くした十月二十八日付の新聞をゴミ箱に投げ入れ、目的地へ急ぐのであった。

(後書き)

そんなに怖く仕上がりませんでした。もっと表現力を鍛えてきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3930o/>

ベルセルティの手紙

2010年10月19日00時06分発行